
夏雪

ゴリヴォーグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏雪

【Nコード】

N6505T

【作者名】

ゴリヴォーグ

【あらすじ】

夏の日には俺は少女と出会った。スランプに陥ったライトノベル作家の山寺和真は、逃げるように故郷へ帰る。そこで彼は中原雪華なかはらせつかと出会い交流を深める。1年後、ある人物の訃報を聞いて故郷に戻った彼を待っていた意外な展開とは。一夏の思い出は、永久の絆に

夏の少女

書けない　ネタが思い浮かばない。俺は今、所謂スランプ状態に陥っていた。物書きという湧き出るアイデアを書き連ねる職業に付き物だが、俺も例に漏れず、不振の時を迎えてしまった。これまでアイデアに困ったことは何回もあったが、ここまで深刻なスランプは初めてだった。なんとというか思いついた話はすべてどこかで聞いたことがあるような、見たことのあるような既視感に囚われてしまうのだ。

そもそも小説、それもライトノベルというジャンルは、ある程度王道とも呼べる展開が繰り広げられるが、どうしても似たような話になってしまう。一度本屋に立ち寄って見てもらったら分かると思う。似たようなキャラクターの主人公を中心にハーレム万歳なラブコメを繰り広げているだろう。全くあれのどこが面白いというのか。こう言いながらもライトノベルで飯を食わせてもらってる身だ。

もともとそんなものを書くために作家を志したのではない。芥川賞や直木賞に応募するような純文学作家になりたかった。だから友人に進められて何の気なしに応募した作品が、出版社で行われたコンテストで佳作として入賞し、ライトノベル作家として活動することになった時は、かなり落ち込んだ。別にライトノベル自身を否定するつもりはなかったが、望まぬ成功をしてしまい、出版社には望まぬ展開を強いられた。そんな書きたくもないものが、アニメ化やらメディアミックス展開で成功してしまったから余計たちが悪い。

「どうしてこうなった……」

作家として食っていけるのは、ホンの一握りだ。幸運なことに、俺の場合、作品が成功したため、ある程度は収入で生きていける。特にアニメ化関わった皆様には足を向けて眠れないのだ。

「こんなつもりじゃ無かったんだけどな……」

さて話を戻そう。空前絶後のスランプに陥った俺は、取材という理由にかこつけて、故郷に帰っていた。東京は俺には少しばかり居心地が悪かったのだ。

人気の少ない古びた神社の境内にあるベンチに寝転がりながら、俺はこれまでのことを考えていた。

昔は何かあると、ここに来ていたものだ。

「しかしここに来るのも何年ぶりかね……。何一つ変わってないや。自分を育ててくれた景色がそのままだということに安心する。忙しなく時間が流れた都会と違って、田舎は緩やかに悠久とも思える時間が流れる。子供達は虫取り網を持って林に入っていく、若者よりも元気なお年寄りが畑を耕している。」

「何やってんだろ、俺」

連日徹夜続きだった俺は眩いばかりの夏の日差しの中、睡魔に負けて眠りこけるのだった。

「」

「ん、……寝てたのか？」

日も沈みつつある中、夢から覚めた俺を迎えてくれたのは、聞いたことのない声の持ち主だった。

「……？」 目を開けると、小さな子供が俺を眺めていた。小学生だろうか。子供向けアニメのキャラクターのポーチをつけて、麦藁帽子をかぶっている。

「なんだ？俺の顔になんかついてんのか？」

ジーと見つめられて訝しげに聞く。

「……………」

「なんだよ、じろじろ見やがって。お兄ちゃんは君と遊んでる暇なんか無いんだよ」「おじさんはいそがしいのですか？」

「ああ忙しいとも。後俺はまだピチピチの24歳だ。おじさんなんて歳じゃない。ちゃんとお兄ちゃんと呼べ」

誤解がないように言わせてもらうが、俺は断じてロリコンではない。むしろ好みのタイプは年上だ。

「お兄ちゃんねてました？」「寝ることに忙しかったんだ。つうわけで俺はもう一眠りする。あゝ忙しい忙しい。話す相手が欲しかったら壁にでも話しているんだな」

「お兄ちゃんあそんでくれないのですか？」

宝石のように濁り一つないつぶらな瞳で話しかけてくる。相手が俺だから良かったものの、特殊な性癖を持つ人が相手だったら間違いないくコイツは不幸になっていた。それでも、その眼の破壊力は凄まじく、

「うっ、そんな期待するような目で俺を見るな！」

「？」

この俺が理性を全力で抑えなければならぬほど、幼女の持つ力は凄いのだ。最近テレビで引つ張りだこの子役がなんでみんなに愛されるか分かった気がする。

「あそんでくれませんか？」

厳しい家に育ったのか、ヘンテコな敬語を使う。年上を敬ってくれるのか。なかなか見所のある子供だ。

「わーたよ、遊んでやる。だけど今日は遅い。明日の昼もここにいてやるから、気が向いたら来いよ」

「ありがとう！ あっ……………」

満面の笑顔で感謝の言葉を言ったと思うと、急に何かを思い出したかのような反応をする。

「おじいちゃんが言っていました。知らない人について行っちゃダメ

だつて」

子供はしょんぼりとする。それすらも今の俺は可愛いと思つてしまふ。

「山寺和真だ。これで俺は知らない人じゃなくなったぜ」

気を利かして名前を教えてやる。どうも俺は随分お人好しみみたいだ。

「ホントだあ。私はなかはらせつかささいです」

なかはらせつかねえ。なんつうか夏に合わない名前だな。どんな漢字を書くんだらうか。彼女に一つ興味がわいた。

「ゆびきりしてください」

せつかちゃんは小指をこちらに向ける。

「あゝ、指切りしなくても逃げはしないんだけどなあ。ま、いつか」

「指切りゲンマン嘘ついたら針千本のーます、」

「指切つた!!」

「お兄ちゃんバイバイ!」

せつかちゃんは俺に手を振りながら帰る。

「ああ。また明日」

さよならは別れの言葉じゃなくてまた会うための約束つて誰かが歌っていたけど、まあその通りなんだろう。俺はせつかちゃんが見えなくなるまで、彼女の背中をずっと見ていた。

「なかはら?」

今更になつて気付いたが、俺はなかはらと言つた名字を知っている。

「まさか頑固爺さんの孫か?」

頑固爺さんと言つるのは、この町では知らない人間がない有名な

だ。本名は中原なんとかというが、頑固爺さんのあだ名の通り、偏屈な性格で人の話を聞かないため周りの人たちは頑固爺さんと呼んでいる。しかし頑固爺さんに孫がいたとはねえ。大学に行つてから特に関わる事が無かつたから、知らなくても問題はないんだけどな。

「なあお袋、頑固爺さんに孫つていたのか？」

実家に帰り、ほぼ一年振りの家族での団らんを囲む。色々つもる話も有つたり無かつたりするのだが、とりあえず今日気になったことを聞いてみる。

「頑固爺さん？ 知らないわよ。子供が何人かいることは知ってるけど見たことないし。いるんじゃないの？」

実に投げやりな答えだ。あまり関心がなかつたのだろう。

「どうした。急に中原さんの話題を出して」

一家の主たる親父が会話に混じる。小説家になると言つた時はかなり反対され、縁を切られる一步手前まで行つたが、時間が解決してくれるものもあるらしく、帰つて来たときには、晩酌に付き合わされるまでには関係が修復した。作品がアニメ化した時には、

「まあお前が成功することは分かつていたからな」

と、かなり調子の良いことを言った。まあそれなりに仲がいい親子だと思う。

「いやさ、中原せつかつて子にあつてさ。年の割に妙に言葉遣いが正しかったから頑固爺さんの孫なんじゃないかと思つただけだよ」

「兄貴ロリコンなわけ？ やめてよね、身内から犯罪者出るとか洒落なんないから」 妹は俺を害虫を見るような目で見る。

「ちげーよ。そういう残念な性癖は持つてない」

「どーだか。取材とか言つて色々やつてんじゃないの？ キモッ」

「何もしてねえよ。偏見にまみれた目で小説家見てんじゃないねえよ」

「あんたの小説ライトなやつじゃん」

不毛な言い争いを続ける。久し振りに会つたらこれだ。妹の小春は食器をまとめて、

「御馳走様。兄貴、後でモンハンするよ」

と言つて自分の部屋に戻る。

「あんた達何だかんと言いなながら仲良いじゃない」

一連の流れを眺めていたお袋はニヤニヤしながら言う。

「違うな。向こうが兄離れできてないだけだよ」

文句を言い合える仲と言うと、こちらは仲のいい兄妹なんだろう。実家に帰ると徹夜でゲームもするし、たまに小春が俺の家に遊びに来ることもある。小春の友人達からは年の離れた恋人と思われていたらしい。確かに身内びいきを引いても、小春は可愛い部類にはいる。お袋に聞くと、高校でも人気らしく、告白を受けた回数も二桁は有るらしい。それでも全部断り、デートでもすれば良い時間をネトゲに費やしたりスカイプで俺の所に突撃したりと無駄に過ごしていると思えない。

「俺としては、あいつが心配だ」

「そうかしら？ そのうち兄離れしたら間違いなくアンタは取り乱すよ」

「かもね。御馳走様」

お袋の話を適当に流しながら、妹様が待つ部屋に向かうことにする。

「はあ……、はあ……」

作家という時間が不規則な生活を過ごしていたことを恨む。妹に付き合っただけで朝までネットゲしていた自分を恨む。

「はあ……はあ……」

暇があっても、身体を動かさなかったため体力が衰えた自分を恨む。起きたら昼前だったという動かなかった目覚まし時計をうらむ。

「ち、遅刻だあ！」

子供相手に何真剣になっただけかと思うかもしれないが、せっかちやんと約束を交わした以上、それを守るのが男の仕事だ。だから俺は走る。一人で境内で寂しそうな彼女が容易に想像出来てしまう。だから俺は走る。

「あつ、お兄ちゃんこんにちは」

遅刻ギリギリで神社についた俺を、せっかちゃんは昨日と同じ笑顔で迎えてくれた。

おままじと

「お兄ちゃん！ 約束守ってくれたんだね！」

「はあ……はあ……、当たり前だ。俺は出来ない約束はしない主義なんだよ」

まあ実際のところは遅刻仕掛けたんだが、全力で走れば何とかなるもんだな……。息切れを起こしているだけであって、せつかちゃんに欲情しているわけじゃないので要注意を。明日か明後日には筋肉痛は免れないよな……。

「お兄ちゃん！ 何して遊ぶ!？」

昨日あったときは丁寧な印象を受けたが、今こうやって遊びたくて遊びたくてうずうずしているところを見ると、やっぱりお子様だ。子供はこうでなければな。昨日と同じ麦藁帽子をしていて半ズボンというその姿は、男の子といっても問題はなさそうだ。ボーイッシュな女の子か……。使えるな、うん。後でメモっておこう。

「お兄ちゃん何してるの……?」

「お仕事さ。そうだな……。せつかちゃんは何したい？」

特に思いつかないので、ここはせつかちゃんのやりたい様にしてやるう。子供に付き合うのも大人の務めだ。

「えーとねえ、それじゃあおままごとしよっ!」

ニツコリと笑って言う。俺の年齢を考えるとお飯事はかなり恥ずかしいが、断ったらせつかちゃん泣いちゃうだろうしなあ……。

「わーたよ。で、俺は何をしたらいいんだ？」

彼女が泣くぐらいなら、俺が帰って泣けばいいさ。しっかしお飯事なんかいつ以来だろうか。小春に付き合ってしまったことはあるが、あれも10年ぐらい前だしなあ……。そっぴああの時も恥ずかしさが強かった気がする。歳の離れた妹相手とはいえ、思春期真っ只中

の中学生にもなってお飯事と言うのはなかなか羞恥心を刺激したからな。当時の友人いわく、俺は傍から見たら幼女相手に遊んでる変態と見られていたらしい。誤解も冤罪もいいとこだ。

「そーだね、じゃあお兄ちゃんがパパでわたしがママをするっ！あつ、でも子供がいらない……」

神社には二人だけしかいないことに気づきしょんぼりとする。別に新婚みたいな感じで進めてもいいと思うんだけど、せつかちゃんは核家族ご所望らしい。子役ねえ……。

あつ、いいところに一人いたわ。

「せつかちゃん、ちよつと待つてて」

そういつて俺は携帯電話を開く

「で、私はおままごとに付き合わされるためだけにこんなところまで呼ばれたと。なんで私を巻き込むかねえ……、今いいとこだったのに」

「ネトゲするより外で遊んでるほうが健康にいいだろ？」

「万年文化系に言われたかないわよ……」

夏休みの間をネットの世界で過ごしているだろう小春を召喚したのだ。ネトゲでいい所だったのか、明らかに不満そうな顔をしている。

「お兄ちゃん、この人だれ？」

せつかちゃんが聞いてくる。そりゃ見慣れない人が来たら当然のリアクションではあるよな。

「ああ、こいつは俺の妹の小春。小春おばさんって呼んでやれ」

「はじめまして、小春おばさん。わたしはなかはらせつか五歳です」

昨日みたいに丁寧に挨拶をする。

「ねえ、なんでおばさんだとかなのにお兄ちゃんて呼ばせてんだよ気持ち悪い今すぐ死ねと言いたいことは山ほどあるんだけど……、」
「何だ？ おばさん」

「兄貴のほうが年上でしょ！！ 私がおばさんならアンタはおじさんじゃない！！ ってそうじゃなくて、なにあの可愛い生物！！」

小春はきらきらした目でせっかちゃんを見ている。ぶっちゃけ俺よりこいつのほうが怖いんじゃないかなろうか。

「誘拐したの？」

今度は犯罪者を見るような目で俺を見る。言うておくが、俺は無罪なんだ。

「してねえよ！！ なんつつか懐かれた」

「ハア！？ なにそれ」

「俺も知りたいっての」

「お兄ちゃんたちなにおはなししているの？」

勝手に兄妹の世界に入り込まれたため、せっかちゃんは不安そうに聞いてくる。

「いやあ、世界経済について語ってたんだよ！！ ほーら、小春。

あれが円安だよ」

「やだなあ兄貴。あれはお賽銭箱だよ」

「あはは、おもしろーい」

話の意味がわかってはいないだろうけど、俺と小春のやり取りを見てせっかちゃんには自分の事のように楽しそうに笑う。

「せっかちゃんだっけ？ 私は山寺小春。和真お兄ちゃんの妹なの。

できればお姉ちゃんて呼んでくれたら嬉しかったり」

おばさん、無理すんな。和真お兄ちゃんなんていつ振りだよ。兄

貴呼ばわりに慣れてしまったから背筋がぞわぞわしてるんすけど。

「うん、お姉ちゃん！！」

「はうううん！！」

まあこちらの思いなんか知るわけが無く、実にいい笑顔でお姉ちゃんと呼んでくれた。妹は非常にキモイリアクションをしてくれる。

わが妹ながら冗談抜きで将来が心配だ。

「はあ……、はあ……、せっかちゃん、もう一回言って」

「おまえ、今の顔鏡で見ってみろよ」

性犯罪者みたいな顔してるぞ。どんな顔か知らないから独断と偏見にまみれているけど。

「お姉ちゃん？」

「来たああああああああああ！！」

こいつ、一応高校ではモテてるんだよ……。千年の恋だって冷めるぐらい気持ち悪い声を上げて昇天する。

「お姉ちゃんどうしたの？」

「発作が起きただけさ。三分後には復活してる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6505t/>

夏雪

2011年5月30日12時55分発行